
プロジェクト IFRS のエンドースメント手続

項目 第 39 回作業部会で聞かれた意見

本資料の目的

1. 本資料では、第 39 回 IFRS のエンドースメントに関する作業部会（2017 年 11 月 20 日開催）の審議で聞かれた主な意見（本日の審議に関連する部分のみ）をまとめている。

IFRS 第 16 号の会計モデルの確認について

2. IFRS 第 16 号の会計モデルでは、貸借対照表で認識するもの（使用権資産）と、履行する対象（原資産）に違いがある点に違和感がある。また、使用権資産は無形資産に見えながらも、費用化は IAS 第 16 号「有形固定資産」に従う点も違和感がある。
3. リースに係る資産及び負債が、概念フレームワーク上の資産、負債の定義を満たすことを理論的に否定することは難しいと考える。
4. 理論的に否定するのは難しいかもしれないが、作成者としては、資産及び負債を認識することに違和感がある。例えば、企業が輸送サービスのため船舶を手配するのは、基本的には安定した輸送能力の確保が目的であるため、資産及び負債の認識はその目的と齟齬があると感じる。
5. ファイナンス・リースとオペレーティング・リースの経済的実態を同一とすることには、理論的な説得力が乏しいと考えており、IFRS 第 16 号の開発の過程では強引に両者に同一の会計処理を求めた印象を持っている。
6. IFRS 第 16 号は IAS 第 17 号の問題点への対応を図りつつ、短期リースや少額資産のリースといった実務的な例外措置により当該対応を補完していると理解しているため、これらを総合的に判断してエンドースメント手続をすすめるべきと考えている。
7. 財務諸表利用者の立場からは、IFRS 第 16 号の開発の議論において、オペレーティング・リースに係る資産及び負債を認識するか否かが最も重要であり、損益計算書の費用認識のあり方については二次的な議論であった。この点で、IFRS と米国会計基準の損益認識のパターンの違いは、統合によって会計基準がより高品質となる程度のものであり、エンドースメント手続において「削除又は修正」とすることは難

しいと考える。

8. 会計基準に係る基本的な考え方の観点では、当期純利益に影響を与える項目が検討の中心と考えられるが、IFRS 第16号の単一モデルは、利息の資産化やキャッシュフロー計算書上の表示にも影響を与えることが想定されるため、これらの影響についても議論を整理しておくことが考えられる。

以 上